

§ VIII 県立図書館

1 総 説

昭和35年度をかえりみると、5月の全国図書館大会をピークとして、それからずっと図書館奉仕の体制を、徐々にではあるが、整えてきたといえる。

昭和34年度の全国図書館大会は、新装成った愛知県文化会館を中心としてまことに華やかに開催され、スケールの大きい建物とともに、その多彩なプログラムゆえに参加者の「どぎも」を抜いたようである。この名古屋大会のあとを受けて、福島大会を開こうというのであるから、決して容易なものではなかった。

この全国大会が終ると、今度は、新しい図書館にふさわしい諸規則の制定という仕事が待っていた。6月20日である。「福島県立図書館利用規則」、「福島県立図書館処務規程」、「福島県立図書館に勤務する職員の勤務時間の特例に関する規程」、それから昭和34年10月1日に出了「福島県立図書館組織規則」の一部を改正するという、以上四つの規則類である。

次いでブックモビールの巡回計画を中心にして、館外奉仕の計画を全面的に改めた。つまり、今まで、分館貸出文庫のあるところもないところも、また青少年巡回文庫がうまく運営されているところも、そうでないところも、殆ど無差別の状態でブックモビールを動かしてきたのであるが、今度は、分館に重点をおくところ、青少年巡回文庫に重点をおくところ、およびブックモビールに重点をおくところ、といった具合に全県下を三つにわけて館外奉仕のための重点地域を設定した。

最後に、目立ったことといえば、館内の整備をしたことである。例年行われる10月の曝書期に、参考事務室を独立させて、利用者のために積極的に相談に応じようとしたこと。一階の児童室を3分の2は必ずしも児童に限らないことにしたこと。つまり、お母さんでも利用できるし、高校生でも、大学生でも、2階や3階だけで間に合わないときは、この1階の3分の2のところを開放しようとしたこと。これはかなり大きな変化であったと思われる。

2月に入ってから、昭和36年度分として認められた設備費—利用者の机と椅子—を、昭和35年度に繰りあげて使用してよいとの許しを得たので、あふれ出る利用者のために、急ぎ机と椅子とを注文した。三学期は、受験期であるため、連日超満員であって、開館前は長蛇の列をなし、開館後は展示室に在って机と椅子の空くのを待つ学生でいっぱいである。

もう一つ、昭和35年度の特長は、昭和34年度の第4四半期において実験的にこころみた「日曜日のA班及びB班の交替制勤務」が固定化したことである。

もう一度、昭和35年度の特長を反省してみると、(1) 5月の全国大会の開催、(2) 6月の諸規則の制定、(3) 7月以後のブックモビールの運行、(4) 10月の曝書期における二つの部屋の模様がえ、(5) 2月に入って財政当局の理解から机と椅子とを約50人分増やすことができたことである

A 全国図書館福島大会

正規の大会は、5月25日から27日までの三日間であったが、大会開催の前日、即ち24日は、各部門別の総会が開かれ、前々日の23日は各部門別の役員会が開かれ、けっきょく合計5日間の大会の日数であった。

だから、23日から各部門の役員会のための部屋とか、各部門別の総会の部屋を世話しなければならなかつたしこれらの会議に出席する人々の旅館をも世話したわけである。

この大会を世話して驚いたことは、第一には予想に反して800名にも及ぶ参加者を得たこと。第二には世話する地元のわれわれが極端に疲れたこと。この二つであった。そして第一の驚きの裏には、参加者は殆ど観光を目的としていることが含まれ、第二の驚きの裏には部門別部会の協議題から司会者にいたるまで、殆ど全部地元が準備して、中心的な主催者の一人である「日本図書館協会」ですら、「お客様」に近い存在であった、ということが含まれている。

そこで、福島大会のねらいをはっきりさせて、福島で開催したことの利益を確実にしよう、と目論んだ。つまり、福島大会の意味は、単に図書館関係者のみの自己陶酔的会合とせず、図書館を利用する一般人の参加をも求め、その人々に何らかの利益があることを念願した。3日間の大会のうち、第1日はそういう日に當てようとして、長野県、高知県、千葉県等からの報告者をえらんだ

全体会議

第1日 時 5月25日 午後2時30分～5時

会場 公会堂 1階大ホール

読書普及実践報告を中心として

(1) 私達の読書会

会津若松市婦竹読書会員 渡辺寿子

(2) 十万人の読書組織はどうしてできたか

県立長野図書館長 叶沢清介

(3) 若い図書館人たちは何をしたか

—高知市民図書館の場合—

高知市民図書館長 渡辺進

(4) “お母さんの本棚”について

市川市立図書館長 山岡寛章

第2日は、午前が館種別部会、午後が問題別部会であった。